

パネル 「メインフレームとワークステーション」について^(*)

日本アイ・ビー・エム(株) 東京基礎研究所 堀川 利明

計算機アーキテクチャの非専門家の立場を踏まえて、少しばかり議論の種になる
りようをここに申し上げたい。

● メインフレームとワークステーションの統合

大型のホスト・コンピュータと個人を主対象にしたパーソナル・コンピュータ
とは、基本的に異なる性格を持っている。例えは次のような点とされる。

ホスト・コンピュータ —— 大なるハードウェア/ソフトウェア資源。

共用資源

大規模ネットワーク

バッチ処理

パーソナル・コンピュータ —— 優れたユーザ・インタフェース

個人専用のハードウェア/ソフトウェア資源。

独立動作

柔軟可能性

この両者を統合して、(理想的話は)両者の長所を統合しようとする試みがある。
例えは「マイクロ・メインフレーム統合(略称MML)」[風沢他 他]の
ように行われていて、日本語 PC/VM BOND という商品になっている。

こういったものは、このパネルではどのような取り扱われるべきなのだろうか。

● 計算機アーキテクチャの科学的基礎付け

このような議論をなさる場に行こうとするときは、いかにいかに、
いつも多少点にかかっている子で、諸君の御高見を伺いたすと思ふ。

計算機アーキテクチャについて一つの議論は(少なくとも私の開いた範囲では)
「計算機アーキテクチャは芸術的なるものである。建築設計と同じくセンスが
ものをいうのである。」というものである。

例えは、西洋美術史なるを復問見ると、芸術の世界にのみならず遠近派の例に見
られるような科学との交流はあった。

計算機アーキテクチャを論じるための科学的基礎付けというものは、今と
るにわたる子で、なかなかどうだ存在しない、私は知っていると思つて
いる。けれども、計算機アーキテクチャの将来動向について、きつてい
るべきことかわかりやうなと思つている。

例えは、メインフレームとワークステーションとを明確に区別し、それぞれに
ついても独自の理論とすべきものを樹立することかできないのだろうか?

(*) ここに述べる考えは、筆者個人に関するものであるが、筆者の属する団体の考え
を正確に反映したものでない。

参考文献

- [文献 87] 星沢, 相原, 平賀, 金田, 秘入, 「日本誌 PC/VM BOWD: マイクロ・メインフレーム結合の突破劇」, 情報処理学会 マルチ・メディア通信と分散処理研究会 1987. 3. 5 予稿